

佳作

確かめたいこと

東京都 羽田 哲

どうしても確かめたいことがあった。

その日は、久しぶりにクウェートから一時帰国していた友と再会した。彼は投手で、中学時代にバッテリーを組んでいた仲だった。

あの日もちょうど同じような、蝉の鳴く、暑い日だった。その日は中学生で、最後の大会の試合だった。しかし、僕にはもう一つ特別な意味をもった試合だった。それは友の日本で最後の試合だったのだ。突然だった、ある大会前の練習後、友は僕にクウェートに行くことになったと、告げた。友の有終の美を飾ろうと、今まで以上に練習をした。

試合は、相手に1点をとられ、その後は点のはいらない、緊迫した試合が続いていた。しかし六回の守備、ランナー2塁のピンチをむかえた。このランナーは返せない。2ストライクとおいこんだ。僕は変化球を要求した。しかし、彼は首を横に振った。ここで点をとられたら勝てない。再び変化球のサインを送る。しかし彼は首を縦には振らない。そのとき、彼から感じたことのない闘志が伝わってきた。打たれる気がしない。直球のサインを送る。彼は深くうなずいた。大きく振りかぶり、足をあげる。腕が振られ、その指先から、小さな白球が放たれる。歓声が響いた。

僕はなかなか質問できずにいた。ここで質問しなかったら後悔する。その気持ちが後押しした。僕はきりだした。「あの日のホームランを打たれた直球を後悔していないか。今でも直球に自信を持っているか。」と。「もちろん」単純すぎる答えだったが、僕の中にあつたもやもやには、それだけで十分だった。

その後キャッチボールをした。大きく振りかぶり、足をあげる。あの日と同じフォームで、腕が振られ、その指先から小さいけれど、大きな夢がつまった白球が放たれる。「パーン」ミットの乾いた音と、蝉の鳴き声しか聞こえない。あの日ミットに届くことのなかった、最高の球がここにあつた。